

## 生活者のリスク認知とリテラシー —近代保険会社誕生から 140 年を迎えて—

東洋学園大学 畔上 秀人

### 1. はじめに

人々は生活の中で様々な不確実性に直面し、無意識にもリスクに備える行動を取っている。経験が蓄積されればリスクマネジメント手法は洗練されていくように思えるが、時間が過ぎて忘れ去られる記憶もあり、必ずしもそうはならない。リスクファイナンスの手法である保険の概念が日本で初めて文字として記されて約 200 年、近代的保険会社が設立されて約 140 年が過ぎている。この間に日本の保険市場は世界有数の規模になり、一般生活者にも広く普及した反面、未だにわかりづらい商品で、その結果「保険の見直し」はまるでファイナンシャルプランナーの常套句のようにになっている。

生活者のリスク認知と金融・経済リテラシーに関連する研究として、報告者は文学者との共同研究を行った。その目的を要約すれば、保険学や経済学では通常資・史料として用いられない小説などの文学作品も活用して、過去の生活者の金融・経済に関する知識水準を推定するとともに、消費者としての行動に影響を与えた要因を探るというものである。また、一定の消費行動が継続する要因の一つとして、親から子にリスク選好が継承されているという仮説を検証した。

### 2. 生活者はリスクをどう捉えてきたか

古来人々のリスク認識と近代保険との関係について、福澤諭吉の『民間経済録』（「経済録」）及び『民間経済録二篇』（「二篇」）を用いて要約を試みる。福澤は「経済録」で、経済蓄積の三大要素は儉約と正直と勉強だと述べる。しかし、いかにこの三者に努めても、「意外の災厄」に遭遇する可能性はあり、それに対する「用心覚悟」をする容易な方法が、西洋諸国で行われている「保険の法」で、経済で最も大切な箇条であると、「二篇」第二章で展開している。

「二篇」第二章後半の最重要キーワードは、「恒の産」である。この言葉は『徒然草』における「人、つねのさんなきときは恒の心なし」、すなわち「人間は、安定した資産がない時は安定した心を持っていないものである」（小川訳注（2015））に基づいている。福澤は、「世ノ災害ハ、恒ノ心ナキ者ヨリ起ルヲ常トス」と述べ、自身が蒙る天災や傷病によって家族にもたらされる経済的リスクに対する十分な備えの不足から「恒の心」が失われ、不法行為に至るといふ。つまり、生活者が直面するリスクとは「恒の産」を失う可能性であり、それに備えるために役立つものが保険ということである。

### 3. 生活者は保険をどう捉えてきたか

『日本永大蔵』を始め、金銭に関わる人々の描写は古くから存在し、しばしば好ましくないイメージで登場する。その根底には、富める者がその富と金融技術を駆使してさらに富を増やす行動への反感がある。報告者は拙論（2019）にて、戦前にも「経済小説」という言葉が使用されていたことを示し、現在のそれと共通する題材の一つに、銀行等金融機関への批判があることを明らかにした。明治

初期の人々は、銀行や保険会社が新業態にもかかわらず、銀行を舞台にした探偵小説や保険を描いた小説を受け入れた。新しい経済システムが、小説という新しい文学ジャンルと組み合わせられて、生活者の興味を喚起した。保険金不払いや銀行の高利貸付は定番のテーマであり、時代が下って労働争議が激化し、プロレタリア文学が普及してくると、実際の経済的事件とともに描かれるようになる。これらの中には著者自身が誤解しているものもあり、それが読者に伝達される。正しい理論と事実を伝える専門書は存在しても、一般生活者には難易度が高く、誤解は解かれづらかったと思われる。またそれは保険営業にも影響し、本来問題のない事例であっても、保険会社が約束通りに保険金を払わなかったといった誤解を、契約者が抱く結果となる。以上から保険には、リスクファイナンスシステムとしての信頼と、リテラシー水準に起因する誤解から生ずる批判という、相反する評価を伴って現在に至っているといえる。

#### 4. データから読み取られること

##### 4.1 リスク選好の継続性

1908年の人口当たり死亡保険年末現在契約人員上位5府県は、富山、京都、福井、愛知、佐賀であるのに対し、2008年度の人口当たり個人生命保険保有契約件数では、東京、富山、福井、石川、静岡である。保険契約の多少は所得の影響を受けるが、それを除いても100年間で上位に位置し続ける地域があり、リスク選好が数世代にわたって継続している可能性がある。

##### 4.2 保険購入と金融・経済リテラシー

全国消費実態調査7回分の都道府県集計データを用い、既存研究(Klapper et. al (2013))に従って新聞への支出をリテラシーの代理変数として、それが生命保険等払込総額に与える影響を推定したところ、ほとんどのモデルで両者には有意な正の関係が見られた。さらに国勢調査と学校基本調査から家族構成と地域の教育水準を表す変数を加えて推定すると、総世帯を対象にした場合、新聞への支出は依然として生命保険等払込総額に対して有意な正の影響を与えることがわかった。

#### 5. むすび

100年以上の期間を対象に、生活者のリスク選好と金融・経済リテラシー、そして保険購入行動の関係を分析することは、データの制約もあって難しいが、新たな事実が発見される可能性を有する。

#### <参考文献> (一部)

- 畔上秀人 2019 戦前期経済小説の存在について—形式的定義による考察—、『研究年報 経済学』(東北大学経済学会) 第77巻第1号、pp. 127-144
- 小川剛生(訳注) 2015 『新版 徒然草 現代語訳付き』、角川ソフィア文庫
- Klapper, Leora., Annamaria Lusardi, Georgios A. Panos. 2013 Financial literacy and its consequences: Evidence from Russia during the financial crisis, *Journal of Banking & Finance*, 37, pp. 3904-3923.